The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日系ペルー詩人ホセ・ワタナベ : 作品とアイデンティティの構築
Author(s)	Randy, Muth
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53886
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　ムース・ランディ・ティモシー　）	
論文題名	日系ペルー詩人ホセ・ワタナベ ―作品とアイデンティティの構築―

論文内容の要旨

ペルーの日系詩人ホセ・ワタナベ(José Watanabe1945-2007)は、その作品の特徴が「日本人性」にあるとされており、そこには俳句の影響が大きいと多くの評論家が考察している。しかしワタナベは、日本を訪れたことは一度もなく、日本語を解せず、彼の知っている日本は日本人である父親を通したものである。本研究は、ホセ・ワタナベが日本人である父親を敬愛する表現として、この「日本人性」を自ら構築したとし、それに基づいて自己のアイデンティティを形成したことについて論じている。彼の作品をナラティヴ・アイデンティティ理論の実例として取り上げ、ワタナベが自らの作品においてどのように自己のアイデンティティを象徴的に語り、人生の物語（ライフストーリー）を構成していったかを明らかにする。そのためにまず、自己と言語の相互関係が重視されるナラティヴ心理学の視点からアイデンティティの観念を検証し、詩という象徴的な言語とアイデンティティの関係を裏付ける。さらに、彼が内面で繰り返し思い描くことによって想起された父親の存在、父親との対話、そして父親の語りの内容という重層的な関係を総体的に考察し、ワタナベが、自らのライフストーリーをどのように構成していったのかを明らかにする。

本研究においてはアイデンティティとその形成概念を心理学のナラティヴ・アイデンティティ理論の視点から考察する。ナラティヴ・アイデンティティ理論では、人間は言語を媒介にして自分や他者のことを理解し、アイデンティティを自ら構築する存在とされる。この理論は、人生の中の経験やエピソードをストーリー構造にすることによって、人生が関係を持たない経験や出来事の集合体ではなく、経験や出来事に一貫性を与え、人生に意味を持たせることを可能にすると主張する。その結果として自己への理解と言語との密接な関係が生まれるのである。語るという行為により、物事の理解の仕方や人間関係がわかるといえる。アイデンティティつまり自己のライフストーリーは、 他者と自己との対話関係に基づいて構築されていると捉えることができる。この理論枠組では、アイデンティティの構築過程において、人生の数えきれない経験の中から自己について語る際に、どの経験を語り、どの経験を語らないか、さらにはどの経験のどの部分を精緻に語るのか、といった「経験の選択」が問題となる。このような経験の選択によって、語り手自身にとって有意味で一貫性のあるライフストーリーが構成されるのである。その過程においてあらゆる人間のライフストーリーは、「スクリプト」といういくつかの限られた筋書パターンに収斂する（スクリプト理論）。幼少時代の自己規定の経験（self-defining memories）という重要な記憶が、ライフストーリーにおける筋書きに大きく影響を与え、子供の頃の経験において、どのような「スクリプト」に沿ってライフストーリーを作り上げるかが定められるとされる。従って本研究の対象となるホセ・ワタナベが、どのようなスクリプトに沿って自己ライフストーリーを作り上げているかを知ることができれば、彼の詩作過程や精神、あるいは作品そのものをより深く解釈できるのではないかと考える。つまり、何故ホセ･ワタナベは、「日本人性」を構築していったか、また、その「日本人性」は彼のライフストーリーにどのような位置づけを持つのかを理解する手がかりになると考えられる。そのために本研究ではワタナベの語るライフストーリーの「スクリプト」を見出し、それに基づいて、彼の作品や様々な場面で彼が語った内容の分析を行うことによりワタナベが自らの作品においてどのように自己のアイデンティティを象徴的に語り、人生の物語（ライフストーリー）を構成していったかを明らかにしていく。

最初の段階でワタナベにおけるペルー日系人としての歴史的な位置づけを明確にする。当時の日本における農民階級の貧困や深刻な失業問題、労働者として日本からペルーに渡った最初の日本人移民の苦難の歴史、時を経てペルー社会に浸透して、多くの分野で貢献している日系人コミュニティの現在に至るまでの歴史的背景を論じる。次にホセ・ワタナベのアイデンティティ形成にあたって重要な役割を果たした家族の状況、特に敬愛していた父親のペルーへの渡航の経緯、また彼が、生まれ育った環境や、人格形成に重要な影響を与えた子供の頃の経験を述べたうえで、文

学者としての成長の過程、ペルーの文学界における位置づけについて論じていく。次の段階では、本研究のアイデンティティおよびその形成の概念を裏付ける理論枠組みであるナラティヴ・アイデンティティ理論について論じる。この理論は、ポスト構造主義における断片化されたアイデンティティの観念に対しての答えを提示し、一貫性のある、意味を持ったライフストーリーを構築することを可能にした。この理論を他者と自己との対話関係に基づいて構築されているものとして論じる。

そこで、ホセ・ワタナベの作品をナラティヴ・アイデンティティ理論の実例として取り上げ、彼が内面で繰り返し思い描くことによって想起された父親の存在、父親との対話、そして父親の語りの内容という重層的な関係を総体的に考察し、彼がどのように自ら「日本人性」を作り上げ、それに基づいて自己のライフストーリーを構築していったかを論じる。ホセ･ワタナベは父親との親密な関係と、父親の故国に対する思い入れによって日本を美化しており、日本に対しての肯定的な受け止めに基づいて彼のアイデンティティが作っていったのである。その結果として、ワタナベは、父親を通した「日本」に自らを重ねて認識するようになり「日本人性」を追い求めることになった。そこにスクリプト理論を適用することにより、この「日本人性」の構築は、ワタナベの人生にとって重要な意味づけになることが明らかとなる。スクリプト理論を通して、ワタナベの「日本人性」が自身のライフストーリーの方向性を定め、芸術家としての活動の有効性をはかる意味も持っていることが汲み取れる。ワタナベにとっては、父親が象徴する「日本人性」が、幼少時代からさらされた否定的なペルーの状況に基づく経験ではなく、理想像に向かって肯定的自己を作り上げる題材となったのである。その結果として、ワタナベの作品を分析するにあって、作品におけるワタナベの独自の「日本人性」を、彼の自伝的背景や歴史的かつ文学史的な文脈の中で有効に位置づけることができる。つまり、スクリプト理論を通してワタナベの作品における「日本人性」は、ワタナベにとって、単なる芸術思潮や文学的、修辞的な技法ではなく、自己アイデンティティの根本であることが明らかであると考える。

また、この［日本人性］を形成する手段として父から受けた俳句の影響が重要な役割を果たしている。ワタナベは、子供の頃から父親を通して俳句に対する愛着を育て、俳句が象徴するものに自らを重ねて認識し、［日本人性］に近づくための手段としたのである。その結果、ワタナベにとっては、独自の俳句の観念が詩作の原点となり、自己のライフストーリーの重要な要素を成り立たせている。本研究においては、ホセ・ワタナベのナラティヴ・アイデンティティの基盤が父親との関係にあると考えるため、次の段階でこの父と子の緊密な絆の背景を述べ、またそれが、ワタナベの人格の形成や文学者としての成長にどのように決定的な影響を与えたかを論じていく。

この背景を踏まえ、次の段階ではワタナベが、どのように自己ナラティヴ・アイデンティティを作品において反映させたかを作品の分析により明らかにする。そのために最も適していると考えられる作品を取り上げて考察を進める。まずワタナベのナラティヴ・アイデンティティの方向性を決定づけた目標とする父親の存在について考察するために“Las manos”（手）を取り上げる。次に、目標である父親を通じての理想像である「日本人性」を明確にするために、“La impureza”（汚れ）“Jardín japonés”（日本の庭）という作品を取り上げる。そして最後に、父親を通じて捉えられた「日本人性」に近づくために俳句の影響を手懸りとしたことを論じるために“Imitación de Matsuo Basho”（松尾芭蕉のまねび）、“Mi ojo tiene sus razones”（私の目には理由がある）と“La mantis religiosa”（カマキリ）を取り上げる。また、インタビューなどの様々な場面においてあるいは、作品の中でワタナベが語る自己についての内容という重層的な対話に注目することで、彼がどのようにスクリプト・コミットメントというプロット構造に沿ってナラティヴ・アイデンティティを構築していったかを明らかにする。

すでに述べたように日本を一度も訪問したことがなく、日本語を解せないワタナベの「日本人性」は、幼いころ亡くなった父親の存在や父親が話して聞かせた内容を通して作り上げられたものにすぎず、しかも「日本」という一般的な言説によるステレオタイプに基づいたものであるとも言える。だからと言ってワタナベの作品が、文学的に価値の劣るものとして位置づけられるべきものではなく、敬愛してやまない、父親に対する懐旧の念や深い愛情の表現として優れたものだと考えられる。文学的に、ホセ・ワタナベの作品は、日系人ならではの独自の視点から新しい文学観を提示するものとして高く評価すべきものと考える。ペルーの自然を、父親に学んだ「日本」を通して観察した結果として、ワタナベの独特な俳句的な文学的視点が生まれた。彼の作品は、日系人としての個人的な経験の表現のみならず、失われた故郷日本に対する深いノスタルジアによる父親への思慕や、その父親に対しての敬愛と、ペルーの排他的な社会の中でワタナベ自身の帰属意識を追究している表現でもある。それに加えて、ワタナベが育ったペルーという空間、文化、言語、歴史的なコンテクストも、彼の人格の形成や文学者としての成長に重要な影響を与えていることも否定しがたい事実なのである。特に彼の母国語であるスペイン語が、現実の構築メカニズムとしてワタナベの詩作における表現の構造や仕組みを定め、スペイン語として「日本」というものを追究しているものになっている。ワタナベは作品において、父親の故国日本の文化を賞賛し、日本の価値観や伝統的知恵をスペイン語で再構築することで西洋と東洋が交流する場を作り上げたといえる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ムース・ランディー・ティモシー）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	金崎春幸
	副 査	教授	伊勢芳夫
	副 査	准教授	ヨコタ村上孝之

論文審査の結果の要旨

本論文は、ペルーの日系詩人ホセ・ワタナベの作品をナラティヴ・アイデンティティ理論の視点から考察し、ホセ・ワタナベの「日本人性」が日本人である父親を敬愛する表現として構築されたものであり、それを基盤として自己のアイデンティティを形成した過程を明らかにしようとしたものである。

全体は７つの章からなり、第１章の序文に続いて、第２章ではペルーの日本人移民をめぐる歴史的背景が説明され、第３章ではホセ・ワタナベの家族の状況、とりわけ敬愛していた父親の渡航のいきさつ、またホセ・ワタナベが生まれ育った環境や彼の文学が生まれていく過程などが述べられる。第４章ではアイデンティティに関わるさまざまな概念が検討されている。ムース氏は、ポスト構造主義の立場から見ると自己像は断片化されて個々のアイデンティティも捏造に過ぎないと説明する一方、ナラティブ心理学は意味のある一貫した肯定的な自己像を築きあげることを可能にしたと述べ、本論文ではアイデンティティおよびその形成の概念を裏付ける理論の枠組みとしてナラティヴ・アイデンティティ理論を採用したと説明している。第５章では、ホセ・ワタナベのナラティヴ・アイデンティティの基盤が父親との関係にあると考える立場から、主に彼のインタビューを対象にして、父と子の緊密な絆がホセ・ワタナベの人格形成や文学者としての成長にどのような影響を与えたかを跡付けている。第６章では、ホセ・ワタナベの複数の詩作品が分析され、父親の存在、父親を通して捉えられた「日本人性」や「俳句」といったテーマが取り上げられる。作品の中でワタナベが語る自己像や父親像を、インタビューなどで自己について語る内容と重ねながら、ホセ・ワタナベがどのようにスクリプト・コミットメントというプロット構造に沿ってナラティヴ・アイデンティティを構築していったのかを明らかにしている。第７章は結論であり、最後に付録として、ムース氏自身がホセ・ワタナベに対しておこなったインタビューのスペイン語原文と日本語訳が添えられている。

ペルーの日系詩人ホセ・ワタナベという、日本ではまったく知られていない作家を取り上げて、しかもその作品を、文学理論ではなく、ナラティブ心理学の理論から分析することは意欲的な試みであり、高く評価できる。特に、ムース氏自身によるインタビューも含めて、インタビューでのホセ・ワタナベの発言をナラティヴ・アイデンティティ理論で説明した箇所は説得力があった。それに対して、第６章の詩の分析では、主に詩の内容とインタビューでの発言を照合させながら、ホセ・ワタナベが「日本人性」を構築していった過程に論を収斂させていくので、作品の中にあるはずの「日本人性」と「ペルー人性」の対立、作家の内にあるはずの屈折や葛藤といったものが抜け落ちてしまったことが惜しまれる。議論を明確にしようという意図はあったかもしれないが、そのために論が単調になっている。また、第４章第２節はポスト構造主義からのアイデンティティ批判の説明にあてられているが、ポスト構造主義的な考え方は第５章以降まったく見られないので、第４章第２節が浮いてしまっている。しかしながら、それらは必ずしも本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上のことから、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本論文について、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを行い、問題がなかったことを付け加える。